

木を植えた男・井部栄範

～ 語られなかった紀州人 ～

The Achievements of Eihan Ibe, a Forester from Kishu Who Laid the Foundations of the Forestry Industry of Kumamachi in Ehime Prefecture

鈴木 裕 範
Suzuki, Hironori

ABSTRACT

Kumamachi in Ehime Prefecture of Shikoku is known nationwide as the “Town of Forestry”. This dates back to the beginning of the Meiji era, when Eihan Ibe of Kishu (the old name of the area covering Wakayama Prefecture and part of Mie Prefecture) planted millions of trees on uncultivated land. Later, as the mountains filled with mature trees, the new forests became central to life in the area, reminding everyone of the importance of nature. Although Ibe passed away almost 90 years ago, his legacy still inspires the people of Kumamachi.

Interestingly, his name is seldom mentioned in his birthplace in Wakayama Prefecture. The preservation of forests and the revitalization of the forestry industry have become serious issues today, relevant not only in one particular mountain town but throughout the country. This paper presents an on-site review of Ibe’s “Green Project” and also explores his origins as a true son of Kishu.

はじめに

「至誠動天」「森林の権化」「久万郷の造林王」。これは、いずれも一人の紀州人について語った言葉である。人物の名は、井部栄範。『郷土歴史人物事典』は

「1842～1914。実業家」と記す。そして、彼を紹介するその『事典』とは、和歌山県ではなく、愛媛県の人物編なのである。

明治時代初め、菅生村一現在愛媛県上浮穴郡久万町一の山は相次ぐ乱伐により荒れ果てていた。木を伐ったあとの山に植林は行われず、剥き出しの山肌が無惨な姿をさらしていた。維新成って、山河荒廃す、である。その光景を目のあたりにして、百万本を超える木を黙々と植えた男がいた。木が生長した山が暮らしを支え、地域に活力を与え、緑なすふるさは経済面のみならず文化的にも、精神的にもいかに人に恩恵をもたらすものであるか。自ら木を植え、人にも植樹・育樹の大切さを説き、苗を配った。それが、井部栄範その人である。



井部栄範肖像。井部剛氏提供

出身地は、「木の国」紀州である。江戸時代の終わりに生まれた栄範は、和歌山県で従来ほとんど語られてこなかった紀州人の一人である。存在自体が知られていない、といっても過言ではない。その最大の理由は、彼が70年余りの人生の大半を、異郷に生き、異郷の土となったことによる。にしても、すぐれた業績を残した紀州人に対し、ふるさとしてある和歌山県は相応しい評価をしなくてはならない。

井部栄範が逝って、90年近い歳月が流れる。土地の人たちはいまでも、「えいはんさん」と尊敬と親しみをこめて呼ぶ。木を育てる理念と技術は現代に継承され、久万町は「林業のまち」として全国的にもすぐれた取り組みが展開されている。「林業王国・久万町」の礎を築き、江戸から明治へと時代が激動するなかで、地域経済の発展・地域住民の幸福について考え続けた紀州人が、井部栄範であった。彼はまた、苦難の境遇下で運命を切り開いた、紀州人らしい紀州人でもあった。

森林環境の保全と林業の再生の問題は今日、単に山村地域にとどまらない。本稿は、井部栄範が行った「木の事業」の実態と特徴を把握することに、目的の

一つがある。二つ目に、「事業」や手記などを手がかりに、その人物像・気質を明らかにしたい。そのうえで、幕末から明治期を中心に生きた同時代の紀州人のうちに位置づけてみようと思う。「紀州人」に共通する“DNA”を見つけ出せるのではないかと考えるからである。そして、三つ目に、井部栄範が出発点とされる久万町の林業活性化と地域づくりの現状について、久万方式と呼ばれる独自の「緑の雇用・山村活性化事業」を中心に考察していくことにする。

木を植えた男

名前が世界で最もよく知られた木を植えた人物の一人に、エルゼアール・ブッフイエがいる。フランスの作家ジャン・ジヨノが書いた『木を植えた男』（『木を植えた男』は、『希望を植え、幸福を育てた男』の題名で書かれた）に登場する、あの主人公である。

ブッフイエは、欧州において二つの大戦があった1900年代前半にフランス・プロヴァンス地方の高地に、木を植え続ける。この寡黙な羊飼いは、神の啓示を聞いた人のように数十年の歳月、一人黙々と、木を植えていった。「この物語は1954年に出版されて以来、何ヵ国語にも翻訳されて森林再生の努力を励まし、人々を感動させ共感を広げていった。一例が「カナダでは一大植樹運動」が起き、植樹される木の数が記録的な伸びを示したという。

ジヨノは、彼の人生において「もっとも忘れがたい人物はエルゼアール・ブッフイエその人だ⁽¹⁾」と答えた。確かに作品の主人公の行為は、感動的である。ところが、ブッフイエは、じつは「人々に植林を促すこと」を意図した作家によって創造された、架空の人物であった。ブッフイエはこのことによって、最も有名な「木を植えた男」になった。

作家の創作が「裏切り」であるとしても、「この地が自然の恵み豊かな緑の大地だったなら。もし森林が蘇れば、この荒地もまた希望と幸福の地へと変貌し、人々も心の豊かさをとり戻す。そして都市文明にまきこまれ、金銭の奴隷にお

(1) 高畑勲訳著『木を植えた男を読む』p82

ちてしまうことからまぬがれるはずだ⁽²⁾」。作家が伝えたいと考えたメッセージは、全人類が21世紀に持ち越してしまった宿題に違いない。

日本における、木を植えた記録は、すでに古代にある。平安時代の貞観8年(866)には、常陸国鹿島神宮造営の材木とするために杉や栗の木が植えられたと伝えられる。鎌倉時代から南北朝時代にかけての建久元年(1190)から正平4年(1349)の間には、熊野地方の杉が土佐国幡多郡や陸奥国などの熊野神社や寺院に移植された記録がある。文亀元年(1501)には、奈良県吉野郡川上村で杉の植林が始まる、これをもって吉野地方での人工造林、吉野林業の嚆矢とされる。

明治時代になり、明治19年(1886)金原明義が造林事業に着手し、天竜川水源地に200万本を超す杉・桧の苗を植えた。明治26年(1893)、明治政府山林局は国有林における30年間にわたる造林計画(12万5千町歩)を立案、明治30年(1897)には森林法が公布されている。そして、明治33年(1900)以後に西日本各地で桧の造林が盛んになっていく先駆けが、栄範たちであった。

再び、エルゼアール・ブッフイエのことである。ブッフイエという人物は、存在しなかった。それにもにもかかわらず、彼の名が広く知られ、無償の行為が読者の共感を呼び、感動をもって読み継がれてきたのは何故か。

自然は想像力を育む、想像力は森林・環境と結びつき、人の心を豊かに満たしていく。無論事実には優るものはない。しかしながら、架空の人物(あるいは伝説や物語が)が、必ずしも森林環境保全、緑の運動に重要な役回りを果たさない、とは言えまい。虚構—それは、ある作家によってつくられた世界—と知りつつ、受け手が共感、感動するようなメッセージは存在する。事実には優るとも劣らない説得力を持つ例を、私たちは知っている。たとえば、宮崎駿が紡ぎ出す生命と宇宙の物語を、私たちは事実としては読まない。しかし、事実には優るとも劣らぬ感動がある。現代は、貧困なる想像力の時代である。欠如するものを埋める何かを求めているのだ。

井部栄範は、存在した人物である。彼がひたむきに生き生涯を終えた愛媛県

(2) 高畑勲訳著『木を植えた男を読む』p95

久万町の住民は、「偉人」「先賢」として記憶している。頌徳碑はその一つの表現であり、地元郷土史研究者たちはこれまで、事業や業績を紹介してきた。なぜなら、彼の行動は林業をはじめ、実業家、地方政治家、社会奉仕と、いくつもの分野に及び、地域史研究に欠かせない人物だったためである。殊に、この地方における林業は、僧籍を離脱し木とともに生きた井部栄範の存在を抜きにして語ることが、できないからである。

しかしながら、その数多い研究に比して前半生、就中人間形成に微妙な影響を与えたと思われる幼い立ちや青年時代に関する研究は皆無に等しく、また紀州和歌山との観点から論述されることはなかったのである。

出生・僧への道・還俗 井部栄範の青春

愛媛県上浮穴郡久万町の中心部に、国道 33 号と並行して車が漸く対向できる道が走っている。造り酒屋や醤油屋の木造の建物、タバコ屋の一昔前のショウウィンドーに往時の宿を偲ばせる家。道は、松山と高知を結ぶかつての街道である。この道に沿って、久万町の商店街は形成されている。明治以前の、日本の情趣をにじませる風景がある。その旧街道に面して、久万町公民館の白い建物はある。



「井部翁頌徳碑」は故吉田茂元首相の書

玄関前には前庭があり、植え込みのなかに、大きな頌徳碑が建っている。碑の建立は昭和 28 年（1953）2 月 22 日、碑文は半世紀という長い歳月を重ね風雪によって劣化し、井部栄範の大きな文字を除いては、文字は判読し難くなっている。碑文は、次のように始まる。

久万街ノ東方延々タル連峰悉ク蒼々タル杉樹素之レ草山化シテ美林トナ

リタルモノ之レ故井部栄範翁ノ偉業ノ片鱗ノミ

井部栄範は、江戸時代の終わり、天保13年（1842）正月25日、和歌山市北細工町に生まれた。北細工町は、和歌山城の東部、広瀬通丁から北へ和歌町に至る道路沿いに位置する町である。江戸時代、文政13年（1830）中細工町が名前を改め成立したということで、和歌山城下広瀬のうちの町人町であった。西側は「武家地」に接した「職人町」であったと推定される。住民は「中野島村の人が移ってきた所」と、『紀伊続風土記』は記す。「中野島村」は現在の志磨神社周辺と思われる。

明治6年（1873）には戸数84、男126人、女140人が住んでいた。明治22年（1889）に和歌山市の町名になっている。昭和20年（1945）7月の空襲で町は焼失した。

栄範は、ここで「父江川治兵衛、母せいの六番目の子どもとして生まれ、四番目の男子であった」とされる。父の治兵衛が何をしていたのか、は不明である。また、一族がその後どのような運命をたどったのかも、明らかではない。

栄範は、嘉永5年（1852）、高野山遍照尊院で仏門に入る。まだ10歳、遊びたい盛りだったはずである。仏門に入った動機や理由は定かではない。久万造林株式会社が昭和14年（1939）2月11日久万町公会堂で開いた創立25周年祝賀式典に際して作成した「来賓芳名」は、「井部栄範翁年譜」で「独立の志を立て」⁽⁴⁾と短い文を記す。「同年譜」の記述は「淡路島金屋村観音寺ニ奉仕仏門ニ入ル」と続く。森川源三郎氏によれば、寺奉公にあがり兵庫県・淡路島の三原郡金屋村にある観音寺、和歌山県岩出町・新義真言宗総本山根来寺で、安政2年（1855）14歳まで修行をする。寺から寺への“巡礼”が、少年にとってどのような日々であったのか、心情を吐露した言葉や記録を筆者はこれまでに確認していない。「口減らしのためだったのだろうか」と末裔は言う。

（3）『和歌山県の地名』p350

（4）「久万造林株式会社創立に廿五周年祝賀式典来賓芳名」p2

青年時代、栄範は伊予国、愛媛県で過ごす。慶応元年（1865）23歳のとき恩師木嶋堅州僧正に招かれて石手寺（松山市・51番札所）に入り、定観坊住職を務めたほか、浄瑠璃寺（松山市・46番札所）の執事なども務めたりしている。そして、20年後の明治5年（1872）、菅生山大宝寺の山門をくぐった。大宝寺は久万町に



四国霊場第44番札所・大宝寺本堂

ある真言宗豊山派の四国88ヶ所の第44札所で、寺伝によれば歴史は平安時代にさかのぼる。いま、菅生山は杉や桧の濃い森のなかにある。樹木が空を隠し、樹齢400年から600年を超す杉、桧の「ぼっくり」もある。参道は昼でも仄暗い。本尊十一面観音をまつる本堂は、阿吽二体の力士像が守る山門を抜け、50段足らずの石段を登った上に建つ。

慶応2年（1866）この寺の方丈（住職）に木嶋堅州が就き、栄範は執事になったとされる。そして、明治5年（1872）、栄範は尊敬する師——中興第15世方丈木嶋堅州は、現在の大西方丈によれば、彼もまた和歌山市の出身であった——のあとを追って、交通不便な山深い菅生村に来了。標高720メートルの三坂峠越えの道は、現在も大小のカーブが連続する険しい山道である。三坂峠を越えると、気候も地形も一変する。峠道を越えるとき、終焉の地との意識があったか否かは、詳らかでない。

栄範は、これに先立つ明治2年（1869）、28歳のときに井部姓を称し、自ら井部栄範と名乗るようになったとされる。菅生村に移り住む3年前にあたる。「井部」という姓を選んだ理由を示す資料は確認されていない（井部家にある記録では、栄範は父の姓名も「井部治兵衛」とし



大宝寺の森林

ているのである)。師弟は明治6年(1873)、寺が所有していた山に杉苗を植え始めた。寺の経営のために山林に着目したものと思われる。ところが、悲劇が襲う、火災である。翌7年(1874)4月2日、寺は炎上し灰燼に帰す。「年譜」は述べる。「明治7年菅生山大宝寺ノ祝融ノ災ニ罹リ決スル所アリ還俗ス」。「決スル所アリ」とは何を指すのか。いずれにしる僧籍を離れ、「聖」から再び「俗」を生きることを決意したのである。「経をよく読み、徳の高い僧ではあったが、世の中のことに疎い師」(大西方丈)に比べて、栄範はすぐれた経済感覚を備えた人間であった。彼が選んだのは、木を植え育てることであった。師である木嶋住職と相談した結果であるといわれる。

新時代を林業に生きる

明治という新しい時代の到来とともに、井部栄範は僧衣を脱ぎ、林業で生きる決意をする。その胸中を推し量ることができる発言、手記⁽⁵⁾が残る。引用する。

明治維新、幕府諸侯ノ城郭モ桑園茶園ニ変シ寺院ノ境内ニモ波及シ一般帰俗スルノ輩多シ我菅生山ノ如キモ今後ノ維持方法ニ苦シム

明治新政府は近代という時代の扉を開いたが、多くの人々にとって近代の序章から未来は見えにくかった。新しい価値と古い価値が闘ぎ合うなかで、人は生きる道を模索していた。彼の目は、緑の喪失と山の手入れを怠る人々に向けられている。

廃藩置県以来我郷人民ハ一時ノ浮利ニ迷イテ天然ノ森林ヲ濫伐シ禿ゲ山トナルモ顧ミズ漸ク深山ニ斧鉞ヲ入ルゝニ至タレハ其ノ産額ノ減シタル推シテ知ル可キナリ栄範深ク之ヲ憂イ退テ熟考スルニ山林繁殖スルハ目下ノ急務ニシテ木材ノ運輸隆盛ニ趣クトキハ嶮岨ノ鑿開モ言ハスシテ自

(5) 伊藤義一「久万山造林の先覚 井部栄範翁」(『久万造林七十年の歩み』) p12

ラ行ハルヘシ然リ而シテ栽樹ノ当地ニ適シ且ツ需用ノ博キモノハ杉樹ニ
如クナシト奮然ト志ヲ立テ

久万地方の山々は森林に覆われ、「松山城の（建築資材の）木は久万から出た」と伝えられるように、すぐれた木材を産出してきた。久万山の名に相応しい森が広がっていた、と記録は讃える。江戸時代、各藩が行なった山林管理政策によるところが大きな要因でもある。

たとえば、紀州徳川藩は、寛永 13 年（1636）、「奥熊野山林御定書並びに先年之壁書⁽⁶⁾」で山林制度を成文化し、熊野地方で伐ってはならない木を留木など御制木としたり山焼きを禁じたりする森林資源管理を断行している。

ところが、明治時代になり規制が解除されると、人々は競って目先の利益を追い、御制木や大木は次々に切り倒され、金に換えられていった。その結果、山肌を露出させた山が至る所に出現した。山は焼かれ、一部は畑になった。「米一升貰ったら、山をあげる」という時代である。「山が禿げたら米が出来る」、と俚謡に歌われる。伐採したあとの森は植樹をし、再造林することによってこそ循環するのだが、その「森の理（ことわり）」は忘れられ、森林資源が急速に失われていった。山村における、もうひとつの明治がここにある。

「一時、浮利ニ迷イテ天然ノ森林ヲ濫伐」する人たち。荒廃していく人の心、村と森の将来への栄範の危機感は一層深い。

栄範は、地域発展の方途を林業に求めた。杉を植え、育てる。木は人を救い、森が山村を支える。荒廃する森林、疲弊し展望を持たない住民の姿が、木を植えさせる動機の一つを果たしたとみられる。「奮然ト志ヲ立テ」た、強い意志と決意の表明である。

「大宝寺再興のため、地方の産業文化開発のため、その基をなすものは山を生かすにあり⁽⁷⁾」。

(6) 「和歌山県木材史」第 8 章 熊野（新宮川）流域 p406, 407, 408 409。

(7) 「井部栄範」（『久万町史』）p903

「寺の百年の計は植林にしかず」であった。久万地方は冬、雪が多く、昔は雪害が多かった。雪の重みで、木が折れることは常であった。しかしながら、山国ではあっても、吉野や紀州の急峻な山に比べると、「山はなるく、土壤は恵まれていた」。「蔭地」で、杉は植えやすく、すぐに育った。山の手入れはそれだけ容易ということになる。

栄範は短い期間に、久万地方の気候風土、地質や木の適性などを知悉していた。驚くほどの調査研究をしていたことを示す。それにしても、人並みすぐれて山に精通した知識や技術は、どこで習得したのかは、明確ではない。栄範の出身地が紀州であり、そのことをもって「紀州・吉野の林業を見聞していた」という推測がある。確かに彼は少年時代を高野山や根来寺で過ごしている。仏門に入った少年が人並み以上に聡明で、青年時代に多くのことを吸収していたことは、想像に難くない。にしても、である。彼はいつ、どこで、どのような方法で、情報に接触し、知識を習得したのであろうか。今後の調査の一課題である。

木を植え、木を育てる

久万地方に、栄範以前に木を植えるという考え方はなく、植林は栄範によって本格的に始まった、とされる。彼自身が記した植林の記録がある。記録は、明治6年（1873）から始まる。

明治6年（1873）には3千本の杉苗を植えた。翌年は4千本、次の年は7千本、9年には1万5千本、こうして明治14年（1881）までの9年間に16万9千本の杉苗を植えている。植えた場所は、字中通山と字中組山にある大宝寺の所有地と自身の所有地の2ヶ所、計15町であった。明治14年9月末時点（報告書）で、11万8千本は植え込みに成功しているが、5万7百本の枯損木が出ている。植込数の3分の1近い数字は、苦闘のあとを物語っている。

苗木は広島県や奈良県吉野地方から購入している。苗は「三津浜港に荷揚げされ、そこから馬で久万地方まで運んできた」。明治28年（1896）12月、奈良県川上村西河の上平豊吉から吉野精選杉、桧種子が栄範宛に送られている。「量



久万町は四方を山に囲まれた町



㊦が印。久万造林の森林

目 17 貫，杉，檜杣石，杉 5 斗入 9 メ目，
檜 3 斗，松 2 斗 7 メ目」の記録が残る。
明治 28，29 年頃から実生苗木の栽培
が行われた裏付け資料である。⁽⁸⁾

苗木は広島でも求めている。木の適
性に加え，愛媛県の山村から出身地和
歌山は遠く，吉野地方は和歌山からさ
らに 100 キロメートル近く紀ノ川をさ
かのぼらなくてはならない。瀬戸内海
をはさんだ広島県地方にも苗を求めた
のは，当然だったかも知れない。ちな
みに，栄範の妻リキ（旧姓吉田。弘化
13 年生）の出身地が，現在の広島県豊
田郡豊田町御手洗である。2 人の出会
いと苗木の産地との間には関連があっ
たのであろうか。あるいは修業の過程
で香川，広島，岡山などを行脚するこ

とはなかったのか。そこは瀬戸内をはさみ，指乎の位置である。栄範の旺盛な
研究心は，やがて久万地方の山地，風土に適した苗づくりに成功する。彼は，自
家育苗の杉苗を開発すべく，不断の研究・努力を続けていたのである。

⁽⁹⁾
肥料ヲ施サス往年荒蕪ニ属シタル山地或イハ代替畑ノ荒蕪シタルモノニ
栽エテ其ノ伐採ノ期ハ初年ヨリ三十二ヵ年ヲ経テ十分ノ二五ヲ間伐シ五
十年目ニ至リ始メテ輪伐ノ方法ヲ施サント欲スルナリ

(8) 森川源三郎「久万造林株式会社七十年の歩み」（『久万造林株式会社七十年の歩み』）p40

(9) 東京山林共進会報告書（『浮穴史談創刊号』井部栄範翁特集号伊藤義一「久万山造林の先
覚 井部栄範翁」）p14

久万造林株式会社 4 代目社長井部剛氏や元取締役大野頼和氏は、栄範がモデルにしたのは「吉野林業」だという。その根拠に、(1) 吉野地方から苗木を持って来たこと (2) 吉野地方の林業の特色で久万地方にはない「密植」という植林・育林方法がとられていたことをあげている。

吉野林業は、1 ヘクタール当たり 8 千～1 万本もの密植することで、まるく芯が中心にあり、年輪の幅が均一な杉をつくり出す。枝打ちを減らし少ない労力で優秀な木を生産する。芯材が美しいピンクをしているのも、吉野杉の大きな特徴であり、これは吉野地方の乾燥の方法、技術がつくり出す。では、栄範がどこで吉野方式を学んだかであるが、「高野山での修業時代」と考えられている。とするならば、極めて早熟な少年といわざるを得ない。

長期的展望を踏まえた林業経営

栄範が作成した、「伐採及収益概算」⁽¹⁰⁾がある。そこでは、伐採計画と収益予想を具体的に示している。山林地主をはじめ地元を説得するには、信頼に足るデータが必要になる。しかも、彼は‘よそ者’であった。

植樹・育樹は長期的な展望に立ち、且つ詳細である。概算見通しの一つの区切りとされたのは明治 63 年、50 年後である。時間がゆっくりと流れる山では不思議ではない時間の捉え方であるが、50 年、100 年後を見すえた山づくりは、「先憂後楽」、緻密である。以下は伊藤義一氏が紹介した明治 14 年 9 月の「東京山林共進会報告書」の抜粋である。

今世上ノ景況ヲ察スルニ濫伐の弊風波及シテ蓄森密林モ漸ク禿山ニ化スコレミナ（中略）筆者一時ノ浮利ニ眩惑シ毫モ将来ノ公益ヲ慮ラサルカ故ニ自然蕃殖ノ念ナキモノ卑見ヲ顧ミス概算ヲ起テ江湖ノ有志者ニ告ント欲ス
計画書は年を追って次のように述べていく。

(10) 伊藤義一「久万山造林の先覚 井部栄範翁」（『浮穴史談創刊号』井部栄範翁特集号）p14, 15, 16

伐採の見込み

明治六年ヨリ同十四年迄植込ノ分十六万九千本ノ内

一杉十一万八千三百本 生長高

内 二万九千五百七十五本

明治三十七年中伐採ノ見込

是ハ手入レ旁々伐採スルモノニシテ即百本二付二十五本の割合

四万本 明治十五年ヨリ伐採時ニ至ル迄 枯損木

差引

四万八千七百二十五本

明治五十五年ヨリ年々六千本迄伐採ノ見込

収益の見込み

一金一万五千五百二十六円八十七錢五厘

明治三十七年中採木即二万九千五百七十五本代金

但一本二付平均五十二錢五厘ノ相場ヲ以立木ノ儘売却スルノ見込

内

金二十四円 明治六年ヨリ同三十七年迄三十二年間地租及地方税村費

但反別十五町歩平均一ヶ年金七十五錢

(以下、筆者略)

そして、附言として、次のように述べている。

僅二十有五町歩ノ地ニ於ケルモ三十二年間ハ只夥多ノ費用ヲ要シ金貸渡世ニ比フレハ利無キカ如キノ想ヲナスト雖モ其費金及利子金ハ前ニ概算シタルカ如ク三十二年目ニ於テ償却シ尚千七百餘円ノ純益ヲ得テ五十年以後ニ於テハ年々三万円ニ殆近キ純益ヲ得テ明治六十三年ニ至テ積テ二十四万五千餘円ノ巨額トナルヲ見レハ億兆歩ノ山野ノ栽培ヲ怠ラズンバ嶮岨ヲ平ニシテ或ハ隧道ヲ鑿ツモ亦何ノ難キ事之アラン且其経過スヘキ星霜ハ永遠ニ似タリト雖モ決テ然ルモノニ非ス宜ナル哉光陰ハ矢ノ如ク豈勉メサル可ケンヤ

木を植え、森を育てることが、地域をいかに潤すか、栄範は具体的な数字をあげて予測している。長期展望に立った造林計画、林業経営と言うべきであろう。

久万町における「木を植えた男」は、荒地を買収したり不毛地を借り受け、造林事業を拡大していった。同時に、水田を購入したり借りて耕し米づくりにも力を入れ、米の売買で得た収入は、山につぎ込む。そうして自らの造林事業として行った面積は、500町歩（ヘクタール）に達する。それだけではない。彼は、明治12年（1880）に菅生村の戸長になると、「大和吉野辺ニ植杉ノ利潤ヲ得ル巨額ナル事ヲ示シ」、杉苗100本ずつを植える、村あげでの「植樹運動」を提唱し、実行する。「一人が200本とか250本の杉苗を三坂峠に運び上げて植えた」という話は、そのあたりの事情を語ったものと思われる。

栄範の呼びかけに答えた人たちがいた。中野村（現久万町）の秋本富十郎や梶川嘉平、成川力蔵らがそうであった。彼らは、栄範の指導のもとに、ともに植林事業を進めていった。

大正15年（1926）、大宝寺の本堂が再建される。その時、寺の田畑の収入は「米百余俵、資金数万円、鬱蒼たる寺有林二十五町歩（台帳）の富を擁する」ほどになっていたという。住職の木嶋堅州はすでになく（明治26年12月31日死去）、栄範もまた、大正3年（1914）2月22日この世を去っている。

元久万造林取締役大野頼和氏は、1960年代に入社した当時、大宝寺の裏の遍路道周辺は昼でも鬱蒼とした林相だったと振り返る。「いまでも語りぐさに製材業者が言うには、久万造林の木は4寸角くらいまでは節がなかった、という。それほどよい木であった。出す木出す木、みなよい木があった。先代（栄範）がどこで技術を習得したかはわからないが、何年かに1回は枝打ちをしていたのではないか」と推測する。「いい木をつくる伝統はいまに受け継がれています」大野氏の顔に自信があった。

四国新道開削と井部栄範

山間部においては道は「命の道」であり、今日も基幹道路・林道等の道路網整

備は重要な課題である。それは、明治時代においても同様であり、四国新道の開削は、瀬戸内海沿岸と太平洋沿岸を結び、伊予・土佐山間部の地域開発・産業振興上からも期待された。栄範は、林業の振興の条件として、早くから四国新道の整備の必要性をあげている。

久万郷八山岳起伏高嶺四周二聳、松山城市ノ要路ニハ三坂ノ嶮岨アリ高知城市ニ到ルニハ黒森ノ嶮坂アリテ運輸頗ル不便ナリ本郡小田郷白杵村ニ到レハ水源流材ノ便アリト雖モ道路狭ク殊ニ霖雨將ニ非サレハ材ヲ流輸スルコト能ハサルヲ以テ寧ロ松山ニ輸出スルニ如カス⁽¹¹⁾

現在、国道 33 号は松山市と久万町間を 30 キロメートル余りで結んでいるが、三坂峠がある山は深い。栄範の手記は、菅生村をはじめとする久万郷がおかれていた当時の厳しい立地状況が記している。ここは、仁淀川―高知県で太平洋に注ぐ―の上流にあたるが、水運も容易に利用できない峻険な土地である。

（筆者略）先年三坂ノ嶮路開鑿ノ説アリキ之ヲ開カハ実ニ便益アルヲ知ルト雖モ其費用ノ莫大ナルヲ以テ遂ニ其説モ立消トナレリ

道路は巨額の費用を必要とする。が、手をこまねいているわけにはいかない、「百年河清を俟つ」間に山村は衰退する。

手記は、杉を植えることを考えた目的の一つは、美林の地域、良質の杉材の産地となることによって久万地方の価値を高め、外部がアクセスの必要性を認めるような地域づくりを実現してい



栄範の署名がある「要路雅記」

(11) 伊藤義一「久万山造林の先覚 井部栄範翁」(『浮穴史談創刊号』井部栄範翁特集号) p12

くことにあった、と述べている。

『要用雑記』は、井部栄範が記した記録だが、「五号」、「七号」は四国新道に関わるものである（写真）。明治18年（1885）新道改修工事（松山―高知間）相談役となり、21年（1888）重信川から南、三坂、土佐国境までの工事を請負、着手している。延長60キロメートル余り、明治24年8月（1891）道路は難工事の末に完成する。その間、栄範は率先垂範し、自らの資産を投入して、道路事業の早期完成に努めている。林業を多方面から、総合的に捉え、実践していったのが井部栄範であった。

井部栄範と同時代の紀州人

井部栄範は、江戸から明治、大正初期の3つの時代を生きた。明治元年（1868）、明治維新により元号は慶応から明治と改まる。栄範、24歳の年のことである。激動の時代、彼の青春は仏とともにあった。

歴史の転換期は、いつでも光彩を放つ人や、異彩の人物を生む。幕末から明治という転換期が、そうであった。歴史の上に現れた紀州人をあげてみる。

栄範より年長に、文政年間生まれの3人の紀州人がいる。由良守応（1827～1894）は日高郡由良村（現由良町）で紀州藩士の家に生まれた実業家である。幼少の頃から文武両道に精進し、明治維新後大阪府や内務省に勤務した。明治5年（1872）、条約改正交渉の岩倉具視一行に加わり渡欧し、帰国した後の74年に東京浅草で「千里軒」と称する乗合馬車会社を営業した。「オムンボス」と呼ばれる二階建て馬車を日本で初めて走らせたことで知られる。

宗教家 北畠道龍（1820～1907）は、和歌山市和歌浦にある法福寺の住職の子で、幕末・明治期に日本で最初の国民皆兵「日本体育共和軍隊」を組織し、天誅組や長州征伐での参加行動で知られる。明治維新後は、北畠講法学会を創立している。南北朝時代に活躍した『神皇正統記』の著者北畠親房は祖先にあたる。

また、同じ文政3年（1820）生まれに、有田郡広村（現広川町）の浜口梧陵（1820～1885）がいる。幕末から明治初頭にかけて多くの公職を歴任、和歌山藩勘

定奉行、大参事、明治政府の駅通頭、初代和歌山県議会議長をつとめた。安政の南海道大地震で大津波が発生したとき、稲むらに火をつけて村民を救い、その後大防波堤を築いたり耐久舎を開設し教育に力を入れるなど、実業家、篤志家、教育家、政治家として名をとどめる。

栄範と同じ天保年間、和歌山市に津田出（1832～1905）が生まれている。津田は紀州藩士の子で、明治維新直後の紀州藩にあって執政、大参事となり藩政改革を実現する。他藩に先駆けて郡県制を実施したほか、官制改革や徴兵制度を断行し、その改革は明治新政府の「モデル」になったといわれる。元老院議員、貴族院議員なども歴任した。

陸奥宗光（1844～1897）は、弘化元年（1844）、和歌山市に紀州藩士の子として生まれている。父親伊達千広が政争に巻き込まれ、一家離散するが、苦学の末に政治家として頭角をあらわす。外務大臣として、不平等条約の改正などで手腕を発揮する。彼は逆境不遇をバネにした人物である。

明治20年（1887）、単身カナダ・バンクーバーに渡ってサケ漁に従事し、カナダ移民の先駆者となった工野儀兵衛（1854～1916）は三尾村（現美浜町三尾）の出身である。

臨済宗妙心寺派管長山本玄峰（1866～1961）は、慶応2年（1866）の生まれである。本宮町湯の峰温泉で捨てられているところを拾われ、少年時代は熊野で林業や筏流しに従事した。10代の終わりに病にかかり失意のうちに四国遍路に出かけ、高知県・雪隠寺（33番札所）で行き倒れになっているところを住職に救われ出家する。その後、全国の高僧について修行を重ね、臨済宗妙心寺派管長となる。

翌慶応3年（1867）には、和歌山市橋丁に、博物学者・民俗学者の南方熊楠（1867～1941）が生まれている。19歳で渡米、米国から英国に渡り大英博物館に通い、『ネイチャー』などに論文を次々に発表。帰国後は田辺市に住んで、粘菌の採集や民俗学などの研究を続け、杜の保存を提唱し神社合祀反対運動を展開した。明治時代に社会主義運動を展開し、「大逆事件」に連座して死刑となり、近年「無罪であった」として名誉回復運動が市民らにより行われている医師・社会主義運

動家の大石誠之助（1867～1911）は、南方と同じ年に新宮市に生まれている。

江戸徳川幕府の終焉、紀州徳川家の解体。明治新政府の誕生は、「御三家」和歌山県にとっては逆風にもなった。しかしながら、日本が近代化に向けての道を歩みだしたとき、和歌山県は多方面に幾多の人材を輩出してきたことも、事実である。様々な紀州人と人生のかたちがある。行動は、個性的だ。転換し変化する時代が、新たな運命を切り開かせ、活躍の場を与えられた人たちがいる。井部栄範もまた、そうした一人であった。幕末・明治における人間群像の中に彼を並べるとき、紀州人に共通する気質をみることができる。その生き方と行動のなかに、紀州人らしさが色濃くあるのを認めないわけにはいかない。

紀州人 その気質と風土

「進取の気象」「冒険的な精神」を有し、旺盛な「反骨精神」の人たち一。紀州人は、しばしばこうした言葉で語られてきた。そして、紀州人が日本の歴史上に残してきた足跡をたどり、行動や業績をみるとき、その紀州人像はいよいよ明確な像を結んでくる。

和歌山県は、いくつもの「日本最初」を生んだ土地である。

醤油は鎌倉時代に湯浅町で誕生した。由良町にある禅宗寺・興国寺の開祖法燈国師覚心が中国から技術を伝えた。今日のカツオ節「本枯れ節」のルーツは、江戸時代にカツオを追って遠く九州、五島列島まで漁をした印南町の漁民が発明した燻乾法に求められる。長期保存に耐えうるカツオ節の発明は、それまでのカツオ節の概念を変える技術革命であった。太地町で生まれた古式捕鯨は、熊野灘を沿岸捕鯨の先進地に押し上げた。煉羊羹は、寒天の開発が次の発明を生んだ。安土桃山の茶会で、驚嘆の声があがったことは容易に想像がつく。これは、和歌山市に本店がある和菓子の老舗駿河屋の祖先によって行われた。

数え上げれば、和歌山発の、あるいはオンリーワンの食文化は多い。「食は和歌山に始まる」、その遺伝子は、現代にいたるまで引き継がれている。この県がそうした歴史を獲得してきた背景には、和歌山県の地理的な位置、気候、風土が見逃せ

ない。そして、紀州人たちの気質によるところが、極めて大きい。

和歌山市出身の作家・劇作家に、岸田国士がいる。紀州人二世である岸田は、「紀州人」⁽¹²⁾（1922年、大阪朝日新聞）で、「自画像」を通して紀州人を語っている。岸田は、言う。

紀州人は「極端に自を尊重する」人たちである。「自」を尊重し、「その自我はしかしそれ以上の目的と結びついて一種の反抗的色彩を帯び、思想的には革命主義を、生活的には進取的・野心的な道を選ぶ」。岸田の分析に基づく紀州人を、歴史のなかに探し出すことは可能である。

「社会的に見える場合もあるが、その実、極端な人間嫌いであることが多く」、「想像力はやや偏奇的で過剰の気味を呈している」。「人のしないことをしようとする天邪鬼的性向」をもち、「だれにも出来ないことをしようという冒険的精神」があり、「常に物事の裏面に意を配る皮肉な習癖」を有する。前述した明治の人間群像の一人一人に、岸田が指摘する特徴を探すことは容易である。岸田の紀州人論は、じつにわかりやすい。

宮城音弥に、紀州人について、地域別に分類した調査報告がある。宮城は、「南国黒潮海岸」⁽¹³⁾で、和歌山県民の県民性を、北部と南部に分けて説明している。それによると、気質は北部は「躁鬱質」南部は「分裂質」に分類している。その特性は、主に北部の人は「話し上手、すれた、島国的ではない、楽天的、がめつい」で、これに対し主に南部の人は「温和ではない、情熱的、反抗的」な特性がみられると指摘している。同一の県であっても北と南で異なる県民性。宮城は、「畿内から山陽地方および四国の瀬戸内海沿岸を経て、九州にいたる地域は躁鬱質地帯である。しかし、和歌山の南部は黒潮分裂地帯に属している」と結論づけている。紀北人の「島国的ではない、楽天的、がめつい」は大阪人に共通する点であるが、当然のことながら大阪人とは違い、隣接する奈良県人にある「とつつきにくい」「繊細」「思慮深さ」とも同じではない。

(12) 北野栄三「紀州と紀州人」（『メディアの人々』）p207, 208

(13) 宮城音弥「日本人の性格—県民性と歴史の人物・南国黒潮海岸」

ところで、宮城は、和歌山県人のなかでも主に南部の県民性は、高知県の県民性と似た傾向があると述べている。両県は、地理的には「黒潮文化圏」に属し、「適応性を欠くが積極的。ある程度理想家肌であるが、それ以上に勝ち気で、勝手な振る舞いをするところがある」という共通点を有するというのである。高知県では中江兆民、幸徳秋水、牧野富太郎を、和歌山県人では紀国屋文左衛門、南方熊楠、明恵が、その具体的な人物例にあげられている。

⁽¹⁴⁾ 北野栄三は、著名な紀州人として南方熊楠と松下幸之助の名前をあげて、紀州人の共通した性格の把握を試みている。北野は2人には共通点があるという。それは、「現状に満足できない、たやすく妥協しない性質」である。また、「紀州人の才能のうしろには、何かしら不満か不平のような契機がしばしばある」と指摘し、佐藤春夫にそれを知ることが出来ると述べている。不平不満は、鬱屈として内部に蓄積され籠もるのだが、それが巨大な力となって噴き出す瞬間がある。井部栄範にも、そうした契機があったというのが、筆者の考えである。

井部栄範に見る紀州人

久万町の人々が記憶してきた栄範は、「木綿の着物に羽織（羽織の紐は紙縫であった）、白足袋に塵（ちり）草履姿」という、質素な身なりであった。その生涯と足跡を俯瞰すると、彼のなかにあるいくつもの紀州人に出会うことは可能である。その前半生は苦難と修行のうちに過ぎた。そして、自ら運命を切り開いたのが実業家として生きた後半生であった。

本格的に林業を始めるのは、30代になってからである。開始当初、山林や田畑などの資産はほとんどなく、いわばゼロからの出発であった。しかし、彼は才覚を発揮し、資産づくりに成功する。⁽¹⁵⁾ 明治14年（1881）、この年初めて土地の買入に記載があり、「山林地5反6畝17歩、田畑6反6畝17歩」、金額は「山林63銭 田畑124円64銭」と記されている。15年には山林地の買入は「39町3反8畝」

(14) 北野栄三「紀州と紀州人」（『メディアの人々』）p205

(15) 森川源三郎「久万造林株式会社七十年の歩み」（『久万造林株式会社七十年の歩み』）p38

金額は「29 円 89 銭」である。

個人経営の育木舎は発展的解消をし、大正 3 年（1914）2 月、久万造林株式会社を設立する。目的は（1）造林（2）製材（3）製炭（4）材木及び薪炭の売捌で、資本総額は 5 万円、初代社長には栄範が就任した。そのとき、山林面積は借地を含めて公簿で 320 町歩余り、50 町余りの田畑を所有し、久万地方を代表する林業経営者となる（現在、久万地方で 100ha（町歩）以上の林家は 3 戸、50ha 以上とあわせても 14 戸 2.6%に過ぎず、3ha～20ha の小規模林家が 86%を占める）。植えた木は杉、松、桧、サワラで 400 万本を超えた。植林開始からちょうど 40 年である（木の生長同様に、これも折り込み済みだったかどうかは不明だが）。栄範は、類い希な経営感覚を備えていた人物と呼ぶことができる。時代を読む能力、先見性において極めてすぐれていた。

北野は『メディアの人々』で、岸田の「紀州人論」を引き、自らの「紀州人論」を展開した。紀州人とは『いずれも他人の真似でない独得の人生を形成しようとした人たち。もしこれを紀州人らしさの遺伝現象と見ると、その遺伝は紀州人の個性の根強さからくる』と北野は考察する。

木の傍に寄り添う紀州人に、南方熊楠がいる。顕微鏡から宇宙を見ていたこの在野の博物学者・民俗学者にとって、木は木それ自体を超えて、生物を育み、森は生命の連鎖の現場、文化の生まれ出るところであった。栄範の木との関わりは、荒廃する森林と環境の面よりも、林業の活性化による地域振興、地域づくりから出ている。その意味では、木と関わっても、エコロジー運動の先駆者南方熊楠と造林王井部栄範は異なっている。しかしながら、粘菌等の研究に生涯を費やした南方と 400 万本を超える木を植え続けた栄範は、常人の尺度では測りきれない、ある種有り余る「偏奇性」と「人のしないことをしようとする」「だれにも出来ないことをしようという冒険的精神」において、相通じるところがある。2 人とも、やはり「他人の真似でない独得の人生を形成」した人たちである。

実業家で、和歌山県でよく知られた紀州人の一人に、浜口梧陵がいる。安政の大津波から村人の命を救い「稲むらの火」で有名な七代目浜口儀兵衛梧陵である

が、幼くして父を失い 12 歳で浜口家本家に養子には入り、家業の醤油醸造元を継ぐ。そして、彼もまた一つの分野で、括ることが出来ない人であった。和歌山市出身の明治生まれのジャーナリスト杉村楚人冠は評伝『浜口梧陵伝』の冒頭に、実務家、政治家、教育家、社会奉仕家などいくつもあげて、その全てに関わったのが梧陵であったと書いた。

井部栄範の行動もまた、林業の世界にのみ止まらなかった。38 歳のとき菅生村の戸長となり、45 歳で県議会議員、46 歳で上浮穴郡聯合会議員、49 歳から 58 歳まで菅生村村長をつとめ、地方政治にも活躍した。明治 26 年（1893）、52 歳のときに久万山融通会社（のちの久万銀行）社長となっている、地方経済にとっての金融の重要性を考えていたためだといわれる。道路が交通不便な僻地においては「命の道路」であると考え、新四国道路開通に私財を投じ、学校の校舎建設などに寄付を惜しまなかった。学校教育が一層必要な時代になることを見通したものだっただと考えられる。自らの利益を追求し、同時に地域社会全体の利益を追う、地域の行く末に関心を寄せ続けたのが栄範であった。

梧陵は大津波に備えて広村堤防を築き、一部は現在も残る。その事業は災害対策、災害復旧のモデルとして今日も注目されている。また、耐久舎を開設、教員を招聘して子弟の教育に力を注ぎ、英語教育の必要性を説いた。国防に関心を払い、宗義団を組織し民兵の軍事訓練もした。2 人に共通性がある。

江戸時代の紀州に、二人の医師がいる。華岡青州と小山肆成である。青州は全身麻酔による世界初の乳ガン手術に成功し、肆成は天然痘予防ワクチンの育成に成功した。医への情熱の根源に、紀州人の体を脈々と流れ、受け継がれてきた精神がある。工野儀兵衛に始まるカナダ移民、あるいは司馬遼太郎が『木曜島夜会』で書いたように、真珠貝を採り、鯨や魚を追ひ、海外に行動の天



久万林は良材で名高い。久万造林で

地をめざした紀州人がいる。若き日の南方が、大石がそうであった。明治という時代は、「娘のために」日本で初めての男女共学の‘自由学校’を開設した教育家・建築家の西村伊作ら、独創的で自由に行動する紀州人をいく人も生むことになる。「これでよい」「ここまででよい」と現状に満足できなかったのが紀州人の有する特性であるならば、井部栄範は紛れもなく紀州人であった。逆境は武器、不満は力、反骨のエネルギーを積極的に変えていった生涯は、紀州人に共通するものである。では、一体井部栄範にとってふるさと紀州はどのような存在であったのか、は興味深い。その手がかりとなる資料を、筆者はまだ知らない。

久万町の「緑の雇用事業」

久万町は愛媛県の中南部、四国山脈に抱かれた標高 400 メートルから 800 メートルの高原にある町である。山間に農地と集落が景観をつくる。人口は 2002 年 12 月末現在 7449 人、「自然と共生する高原文化のまち」を掲げて、農林業に支えられた美しい環境の農山村を基本としたまちづくりを進めている。木を活かし木と共に生きるまちづくりでは、先進的な地域である。

久万町の面積（16, 492ha）の 85%（13, 944ha）は、森林である。その森林の 70%（11, 736ha）以上は人工林で、愛媛県の人工林の平均 64%を上回っている。また、民有林が 95%と圧倒的に多いのが特徴である。人工林の森林は、杉が 68%、ヒノキが 32%となっている。久万町を含めた上浮穴地域は西日本有数の林業地帯で、第一次産業のなかでも総生産額に占める林業の割合は 55%前後と高い。

この町では、1960 年代の高度経済成長期から「品質の揃った良質の木材を大量に生産する」取り組みが展開されてきた。今日では、ほとんどの山で伐採期を迎えている。しかしながら、長引く木材価格の低迷、人件費や資財等のコスト、林業従事者の高齢化という他の林業地域同様の課題が、ここでもみられる。

そうした状況下で、久万町は林業の振興、山村の活性化に早くから取り組んできた。その具体化が第三セクターによる株式会社「いぶき」である。「いぶき」は、林業の担い手不足が深刻化し高齢化が進行するなかで、林業の担い手の育成

を目的に 1990 年にふるさと創生事業の 1 億円等を活用して設立された。設立当初の資本金は 4 千万円、一口 5 万円で町民に出資を呼びかけた。結果、資本金の 40%は町民が出資した。

「若者たちが誇りをもち、農林業で安心して働ける職場環境をつくる」、そのために「いぶき」がまず行ったのが、役場の現業職並みの給与、福利厚生と通年雇用体制の確立である。社員は、労働時間が午前 8 時から午後 5 時、現場終業で、土日、祝日は休み、月給制で役場並みの手当を保証することであった。業務は（1）地植え、植林、下刈り、枝打ち、除伐などの森林施業（2）素材生産・搬出（3）作業道・村内作業路の開設（4）水稻防除作業。

「林業労働力は臨時的かつ季節的で不安定な半端労働力」とみなされてきた。「いぶき」は年間労働力供給体制を整備、本格的な林業請負会社として設立された。社員は積極的な林業研修、高性能機械による現地研修を重ねて経験を積み、林家の信頼を得てきた。

2002 度は治山事業を多く受注し、関連事業の増加が今後も引き続き見込まれる。社員 3 人で始まった会社の社員数は 2003 年 3 月末現在 44 人、社員は 18 歳から 46 歳まで、平均年齢は 31.5 歳と若い。また、脱都会の I ターンから最近では U ターン、高校卒業の新卒が増えている。「サラリーマン林業」が若い世代に歓迎された。

久万町から始まった「いぶき」の事業は上浮穴地方 5 ヲ町村の取り組みへと発展し、1995 年から隣接 4 町村も出資、広域化によって事業の拡大を図っている。2002 年 8 月現在、資本金は 3 億 1580 万円、株主は 470 人、代表取締役は久万町長である。同年度の赤字は 50 万円、累積赤字はない。

今日、和歌山県知事が提唱した「緑の雇用事業」が林業の活性化、森林環境の保全の面から注目されているが、久万町の第三セクター株式会社「いぶき」は、いわば久万方式の「緑の雇用事業」といってよい。和歌山県の同事業が国の事業費を活用、雇用期間が限定されているのに比べて、久万町は将来的に社員の生活を保証、「安心して働ける職場環境」対策が講じられている。和歌山方式として注目を集める「緑の雇用事業」の将来のあるべき姿を、久万町にみる。

常務取締役で久万町役場活性化センター室長の小原均氏は、若い世代に人気がある職場になりつつある原因について、「魅力の第一は休み2日制，二番目が給料」

という。「農林業の担い手は深刻な問題だ。『嫁さんが来ない』ことが，若者が就職を考えると農林業を選択外にしている。しかし，ここは嫁さんが来る，理由はサラリーマンだから」。小原氏は今後の成長に自信を見せる。その自信は地域の活性化に繋がっているというところからきている。



小原均氏は「いぶき」の育ての親

美術館・学校・歩道橋は木造 木にこだわるまちづくり

林業の町・久万町を象徴する施設に，町立久万美術館がある。和風様式の建築，外装は白壁，軒先の赤みを帯びた杉の木肌の美しさ，コンクリートの美術館を見慣れてきた目には，新鮮に映る。そして，この美術館は，館内に一歩足を踏み入れたときから驚きが始まる。

板を敷き詰めたロビーは磨かれて光沢があり，受付の木のカウンターが親しみと安心感を与える。入館料（一般 500 円，高大生 400 円，小中生 300 円）を払い，展示室に入ると，中央には一抱えはある樹齢 80 年を越える杉の磨き丸太の柱が並び，吹き抜けの天井を支える梁は太い桧である。木の香りが漂い，ガラス屋根越しに室内に注ぐ自然光が木の室内を柔らかく，ぬくもりのあるものになっている。建築面積 1,054㎡，日本で初めての木造美術館である。

山間の町に，木造美術館がオープンしたのは，1989 年 3 月。井部栄範の孫で久万造林株式会社 2 代目社長，故井部栄治氏が収集したコレクションが町に寄贈されたことに始まる。「美術館が暮らしに直結する事業か」，議論の末に町は美術館を選択し，まちづくり特別対策事業費を活用して建設した。

館蔵品は井部コレクション 319 点を中心とした 580 点。コレクションは洋画，

日本書画、陶磁器三部門で、洋画は明治の初めから大正・昭和初期にかけての日本近代洋画史上エポックとなる作品群のほか、アバンギャルドと呼ばれた 1910 年代から 20 年代の作家たちの作品、地元愛媛県の作家まで幅広い。総工費は 4 億円近くにのぼった。久万町は一般会計当初予算約 50 億円の町である。

館の運営体制は事実上の最高責任者である館長補佐、学芸員 1 人、パートの女性職員 2 人。年間の予算は約 3300 万円となっている。常設展と年 1 回の企画展のほか、ギャラリートークなどを開催し文化の拠点として情報を発信している。また、図録や絵はがき、テレフォンカードなど美術館グッズは、小さな町の小美術館と思えないほど整備されている。

2003 年で開館 14 年を迎えるが、開館以来 2002 年 12 月末までの入館者はのべ 32 万人に達する。筆者が訪れた 2002 年 3 月上旬、若い女性の 2 人組や学生のカップルが訪れていたが、開館初年には 5 万人を超えた入館者は減少が続いており、今年度は 1 万人程度になる見通しである。「リピーターが少なく、町民の入館者が減ってきたのが原因」（館長補佐橋本広綱氏）。小さな町の美術館経営はきびしい。しかし、「この美術館は林業のまち久万町のシンボルであり、決意であり、木の文化の情報発信の役割を担っている」（同上橋本氏）。

久万町の中心部に、木をふんだんに使った学校がある。久万中学校である。久万中学校は 1999 年に統合したのを機に、木造旧校舎のイメージを継承した木造校舎に建て替えられた。校舎玄関に続くゲートは木で、バルコニーを備えた

正面玄関 2 階は 60～70 年生の杉をそのまま活かした円柱の柱が並ぶ。外壁の板、柱材は桧が用いられ、教室、職員室、校長室、廊下など、至るところに木が使われている。木造一部 2 階建てで高い天井がゆったりとした雰囲気を醸し出す屋内運動場は集成材だが、柱に使用しているのは地元の杉材であ



木の線が美しい久万中学校正面玄関

る。桧通し柱 104 本、杉磨き丸太 64 本は 2 代から 3 代にわたり育てた木を、町内外の篤林家が寄贈した。背後の山の風景と調和した学校は、第 24 回建築士事務所全国大会で建設大臣賞を受賞している。教室の机、イス、校長室の応接セットももちろんすべて木である。

久万中学校は 2003 年 3 月 1 日現在全校生徒 260 人、9 学級で、生徒からは「見た感じが柔らかい」「落ち着きがある」「湿度を吸収し、夏は涼しく冬は暖かい」という声が聞かれ、音楽の教員は「ピアノを弾いたときの反響のよさ」を指摘している。武智省三校長は、木の応接セットをおいた木造の校長室で、「木



久万中学校の屋内運動場

の校舎は心が安まり、生徒にも落ち着きを感じる」と言う。しかし、校舎と屋内運動場で約 20 億円、建設費はコンクリートの学校施設に比べると 3 割ほど高い。この点を武智校長にたずねたら、「学校は町の象徴、久万町は木とともに生きる町なのです」という答が返ってきた。

久万町での学校の木造化は、1988 年から始まった。小学校 6 校は 2002 年に新校舎が完成した父二峰小学校で、木造化が完了した。このほか町内にある図書館の内部、物産販売所、バスターミナルの物産販売所・休憩所である「久万高原駅」の建物や久万中学校前の歩道橋にも木が使われている。町のなかに配置された木造の建築物、それらは木にこだわり木とともに生きる町の、内外に向けての、まちづくりの決意のあらわれといえる。

久万造林株式会社・久万銘木株式会社代表取締役社長 井部剛 氏に聞く

2003 年 3 月 15、16 日に、愛媛県・松山港にある倉庫を会場に、床柱や床材、式台、欄間、銘木家具・工芸品など、地元久万産のほか吉野、秋田、屋久杉など全国から選りすぐった木が展示された。久万銘木株式会社が毎年春に行ってい

る「銘木まつり」で、今回で 62 回を数える。久万銘木は、久万造林社長井部剛氏が社長を兼ねる会社である。

久万造林の 2 階建ての社屋は、久万町の中心部大宝寺への参道沿いに建っている。大正 2 年（1913）に会社が設立されて、2003 年で 90 年になる。剛氏は初代社長栄範の曾孫にあたり、1977 年に急逝した 3 男栄嗣のあとを継ぎ久万造林 4 代目社長に就任した。久万町の本社で井部社長に会いインタビューをした。以下は、その内容である。



久万造林 4 代目社長 井部剛氏

鈴木：

久万林業の今日の基礎を築いた井部栄範氏が亡くなってから、まもなく 90 年になろうとしている。子孫として、栄範という人物について、どのように考えているか。

井部：

地方の偉人として扱われているが、すばらしい経営感覚、社会的貢献をした人物であり、誇りに思っている。ただ、父（故栄治氏）から、話を聞いた記憶がほとんどない。父自身、栄範と接したのは、幼年時代の数年に過ぎない。

鈴木：

彼のどのような面に関心を持つか。

井部：

もともと、この土地には僧侶としてやって来た。それが、還俗し、山仕事をするようになる。特異な行動だが、ある意味では人間的な感じがして、興味深い。心の変化していく過程が肝心なことの気がするのだが…。

鈴木：

粘り強さ、一心不乱な姿勢は、紀州人らしい特質だと言ってよいと思う。

井部：

そうですね。意志が強い印象、すべてが計画的で計算された、そんなところもあったのだろうか。また、古い林業家とは違った印象がある。たとえば、奈良県・吉野地方では「絶対に政治に手を出すな」という家訓があるらしいが、栄範は政治に積極的だった。必要ならば、政治家になってもいいというようなことを述べている。事実、私の父は実業家であったが、政治家になった。また、聞くところによると、山仕事をする人を大事にしたようだ。酒もよく飲んだみたいだ。

鈴木：

彼自身も、推されて、戸長や村長、議員などをつとめている……。

井部：

いろいろな目的は持っていたと思う。林業でなくても、いろいろなことをやれたのではないか。

鈴木：

しかし、明治初頭のあの時代、栄範には山や木の問題が看過ごしに出来なかったということだろう。いま何が大事か、それは将来どうなるのか、そのことを考えていたのが、栄範という人だった気がする。

ところで、栄範が植えた心はいまも、林業に生きているか。

井部：

皆、山を見て、すごいとほめてくれる。実際、材木で商売をしていて感じるのは、育林が出来ていることだ。ちゃんと育てた木は、目が小さくて、枝打ちが行われており、よい板がとれる。現在も、栄範の教えを受け継いだ篤林家が、木を育てている。

ただ、栄範が植林を始めた時代と、いまとでは、時代が違う。林業をとり巻く環境はきびしいが木材の良さは見直されている。林業家はもっと、積極的

に勝負をしていく姿勢が必要な気がする。人づくりもやはり大事だ。木を育て、人を育てていかないと、続いていかない。

鈴木：

人間的に魅力があったということか――。

井部：

人間くさい。そして環俗しながら信仰に対する心を失わなかった人物が栄範だと思う。生涯早朝のお勤めを欠かさず、お経を読誦し続けていることからわかる。

鈴木：

ところで井部さんの体の中の何％かは、紀州人の血が流れている。最後に、和歌山県をどう見ているか。

井部：

ルーツの和歌山県は何となく気になっている。南紀に象徴されるのんびりとした雰囲気が和歌山県にはある。海、山、そして宗教的な風土が気になっている。

社長の井部剛氏は、和歌山県をほとんど訪れていないという。愛媛県・久万町に住んで栄範から数えて4世代目になる。井部家の人々にとって、紀州は次第に遠い土地になりつつあるようにも見える。しかしながら、栄範出生の地に対する思いもまた、あるのである。

速ナランコトヲ欲スルナカレ

井部剛氏から、栄範の数少ない写真のうちの1葉を拝借した。羽織袴に居住まいを正し、前方やや下に落とした視線。穏やかな表情のうちにも、どこか修行僧の厳しさを湛えた顔である。視線の先には、何があるのだろうか。目は、強い意志を感じさせる。

栄範の手記が残っている。久万造林株式会社が作成した『久万造林七十年の

歩み』から、引用する。

⁽¹⁶⁾
速ナランコトヲ欲スル勿レ

小利ヲ見ル勿レ

速カナラント欲スレバ達セズ

小利ヲ見レバ大利成ラズ

忍

持戒苦行及ブ能ハズ

大ハ必ズシモ小ヲ判ゼズ

智ハ必ズシモ愚ニ勝タズ

少キヲ患エズ等シカラザルヲ患ウ

貧シキヲ憂エズ安カラザルヲ憂ウ

先を急ぎ狂奔することに対する批判であり、拙速への戒めである。目先の利益にとらわれるあまり、大局に立った展望を欠き、即ち木を見て森を見ない行動への警鐘がある。大きなことが必ずしも善なのではなく、智者がいつもすぐれているわけではない。富の少なさや貧しさを煩い嘆く前に、平等で、安全で、安心して暮らせる社会とは、一体どのような社会なのか、そのことを考えよう。井部栄範がたどり着いた、ひとつの答があるように思える。それがそのまま発言となり、実践となった。「有言実行」の人が井部栄範であった。

井部家の墓は、久万町菅生の町立久万美術館がある山の南斜面の麓にある。向かって左側に井部家の墓、右に先祖供養塔があり、真ん中にある円筒形の



井部家墓地。山の上に美術館が立つ。

(16) 「久万町の概要」(『久万町のまちづくり』) p1, 2, 3, 4, 5

形をした井部栄範の墓がある。孫の栄治氏が大正9年（1920）に建てたもので、法名は法輪院幻観妙有栄範居士、紀州出身の人物の70年余りの人生における実績が刻まれている。

むすび

本稿は、江戸時代の終わりに生まれ、明治を生きた紀州人井部栄範の人物像とその事業を調査し、紀州和歌山県との関わりのなかで捉え直すことに主眼があった。彼と同時代の紀州人、また紀州人に共通する気質から見ても、栄範の先見性や行動は時代の先駆けとなるものであった。当地では今日も小中学校の社会科の授業で児童生徒がふるさとに生きた偉人として学んでいる。

しかしながら、「偉人」として今日もなお地域で語られながら、井部栄範の全体像は明らかにされたとは言い難い。その人みずからが封印した時間があったのだろうか。これまでほとんど明らかにされていない少年時代、青年時代について栄範が託した資料などの調査、研究が必要である。

本稿執筆中に、久万町在住の文化財保護委員和田正氏から興味深い助言を頂戴した。それは大宝寺にある「享録3年」に刻まれた宝篋印塔の存在で、そこに「栄範」の名があるというものであった。この名と井部栄範の名に関連性があるのかどうか、享録は1500年代前半である。

ところで、日本の戦後の杉・桧を中心とした針葉樹一辺倒の植林政策は、森林の個性や多様性を奪い、山の保水力を低下させ、生物の生態系を破壊してきたという批判、指摘がある。久万町では、この半世紀の林業政策に対する反省が聞かれる。そうしたなかで、林業の振興によって山村を活性化し、若い後継者を育て、森林環境の保全を進めていくことは、日本にとって解決を迫られる緊急かつ重要な問題である。

井部栄範は、杉、桧を中心とした林業経営の必要性を1世紀以上前から説き、活動を続けた。経済面を重視した山づくりに対しては、批判が予想される。し

かし、山に木を植え山を生かし、地域経済を構築していこうという試みはまた、評価されなくてはならない。今後、こうした面からも井部栄範研究は必要である。

2003年3月2～4日まで久万町で行った調査では、井部剛氏、大野頼和氏、小原均氏、橋本広綱氏、武智省三氏、久万町職員などの皆さんに貴重な話を聞かせていただいた。また、栄範の発言、手記等の多くは1954年発行の『浮穴史談』などを引用、参考にさせていただいた。

引用・参考文献

- 『浮穴史談創刊号』井部栄範翁特集号（上浮穴郷土談話会 1954年4月）
『久万造林七十年の歩み』（久万造林七十年編集委員会 1984年9月）
『上浮穴林業の担い手』（株式会社いぶき）
『久万林業・商品生産林業のすすめ』（岩水豊編著 商品生産林業研究所 1978年3月）
『井部栄治と久万林業』（馬喰田高年編著 株式会社ユーカー実業 2000年4月）
『要用雑記』（井部栄範）
『郷土歴史人物事典 愛媛』（景浦勉編 第一法規）
『久万町史』（久万町）
『日本歴史地名大系』第31巻「和歌山県の地名」（平凡社）
『角川日本地名大辞典』30巻 和歌山（角川書店）
『和歌山県木材史』（和歌山県木材協同組合連合会 1993年11月）
『紀伊続風土記』
『木を植えた男を読む』（高畑勲訳著 徳間書店 1990年7月）
『メディアの人々』（北野栄三著 毎日新聞社 2000年3月）
『紀の国100人』（朝日新聞社和歌山支局編 和歌山県勢調査会 1965年）
『和歌山県人』（神坂次郎編 新人物往来社 1982年12月）
『和歌山日本一物語』（和歌山放送編 1998年4月）